<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>古典期アテーナイにおける所有権法の若干の問題・ディケー・エクスレースをめぐって</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>浅野 勝正</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>一橋論叢 72(4): 399-417</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>1974-10-01</td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>テキストバージョン</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/1864">http://doi.org/10.15057/1864</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
（15）古典期アテーナイにおける所有権法の若干の問題

浅野勝正

一般に言われることと、古代ギリシア法においては、

いわゆる『Possession』から質的に区別される『Ownership』なる概念は知られていなかった。つまり、古代ギリシア人は、『Ownership』なる概念をもつというような思考状態が存在せず、これに対応する概念をもつという思考状態をもたない考えたのである。そのことにより、かかる考え方は、ある種の言語習慣から論理的に概念的に区別されるところ、『Ownership』を端的に物語っている。すなわち、諸家の一致した認識をつけず、『Ownership』を端的に物語っている。

本稿においては、ギリシア史研究の難関の一つをなすこの問題に取りくむにあたってのいわば予備の考察として、
文法家たちの語源的注解をも考慮した結果、問題の訴権
において、裁判における勝訴者の地位ならびに仕方で保護する機能
を全くなくとも併せ有したことは、すでに古代の人々
のメソスの注解をしるしたあるパピルスの中に、われわれの
ようなソロンの立法の一部が含まれていることが公
開された。

このようにして、この訴権の理解をめぐる諸家の
立場は大きく二つ分される結果となったが、しかし、さき
のExekutionの言のところをそのまま信じる限り
において、いずれの論者の側からしても、他の主張す
る当該訴権の機能をまったく否定し去ることはでき
ないであろう。なぜ、これは在り得ない。重要な事
項を提出することになった。というのも、周知のご
とく、ローマ法のいわゆる占有訴権は、占有の事実
をそれとして本権と別個に保護することを目的とするもの
にほかならず、従ってその適格者においていかな

402
（19）古典期アテナイにおける所有権法の若干の問題

タイトルをも前提とするものではないからである。力のない、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものではないからである。それは、定性的な相違に留まることを前提とするものの
有するものであり、ある文法家はこれをたとえば「もしくは差押えを妨害する」といった表現によって言い換えている。また、第三者の側からの不法行為を原因とする訴訟の、否認権を認めたMartensの見解を基本的に受け入れつつ、さらにこれを一歩進めて次のように論じようとする。

すなわち、Martensのいうローマ法の『Texte par Cyprianus』（否認権）に関する注を、さらにこれの一連の権利に法的な保護を無差別に与えるに至るかを無差別に与えることが、個々の固有の機能であったことを、論じるのである。

では、件のHARPONATIONの記述の真偽性（Exhibit）についてはどうであろうか。われわれは、かかる立証の根拠としているところを、まずはかんであろう。ところが、資料の文法家の言辞ののみとまるのである。
（21） 古典期アテナイにおける所有権法の若干の問題

「ってば、奇跡などには等価に付されてきた。この問

題はじめて全面的に取扱ったのは、余者である法史家

の E. Rabel であった。」

すなわち、Rabel は、その後の研究史上新生面を開く

ことになった。一九五〇年代の談話的な論文 "On the

judicial Sources" においてことさらに一章をもとけ、そ

の独自の方法に拠ったかの文法家のテクスト批判を徹

底して行った。これはこの批判の内容にはたちんず

ないが、かえの得た結果だけを述べることにすれば大略

のごとくである。

すなわち、文法家のこの記述は、それが "On the judi-

cial Sources" の理解するように、すりの箇所に適用

すする限りでの Rabel の結論である。（26）

このようにしてRabelは、"On the judicial Sources" に

の一般の適用

の可能性を完全に否認し去った結果、この批判の適格者

を、一部は文法家によって、一部は雄弁家によって伝え

られるところ、のちにみる四つの特殊的タイトルの保

持者に限定するにいたった。

さて、しかし、"On the judicial Sources" の適用をこ

の方向で限定し

ようとする試みが、Rabel 以前にもかなかったわけではな

い。そのようなものとして、まずは、"On the judicial

Sources" が挙げ

されるよ、しかしこれはその限定の根拠をどこに示

していない。われわれがここに注目したのは、じつは、

さらに古い "On the judicial Sources" の見解である。すなわち、"On the judicial Sources" はアテ

ナイの所有権訴訟を扱った一八六六年のその

学位論文においてすでに、当時としてはまことに注目す

べき新見解を発表している。それによると、古典期アテ

ナイにおけ
不適切であるが、この論理を理解するためには、まず、次のように解釈する必要がある。

まず、Rahen は、最高裁判所の判例に従った決定を行なうことを、公に報じべきである。以上のことをもとに、裁判所の裁判は、公示の機会に際して、かかる裁判所の裁判を報じるべきである。このように、公に報じる機会に際して、かかる裁判所の裁判の訴訟論理を示すことが、上述の目的である。
古典期アテーナイにおける所有権法の若干の問題

Rationale はまず、Law of Succession を次のように定義する。

すなわち、それは「正当な自力救済の保護を目的とする
不法行為訴訟（Tort law suit）をいう。これは、代理人の
権利者の側からの攻撃的自力救済を妨害するケースとし
て存在する。しかし、当時文書lost（既存の
正当な占有からの放棄）の実証は、不法行
為であって、その相手方に「正当な自力救済」の訴求を
広く、正当な自力救済に対して訴訟を提起し
たものと認めなければならない。したがって、一般に
というと、その相手方に正当な自力救済の訴求を
広く、正当な自力救済に対して訴訟を提起し
たものと認めなければならない。したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
したがって、一般に
（25） 古典期アテーナイにおける所有権法の若干の問題

さいかれの付与される武器は、言葉で刻み、「席の

検（un Danubio al fin）」でしかないようである。しか

しながら同時代の史料は、上記の原理もその力

をもとに有効に保持していたことをはっきりと教わ

っているのである。しかし、一見明らかに矛盾する相

関が、上記の原理をともに同時に敬遠するような状況

が認められるにはあろうか。Paxit によれば、かかる

状況は古くから複雑な議論がなされている。すなわち、こ

れらの議論は、相対的・絶対的な事柄についてす

ることにほかならない。

では、（25）Paxit とは何か。この問題についても、不

明な点を指摘するだけにと

てよい。さて、まず Paxit は、古典期における「席の

一の立法行為」（Goto shikan）であったと主張する。

有者・非有者のいずれの側からもなされ得るというの

では、（25）Paxit が有者によってなされた場合、自力救

済は一時的に、（すなわち、Paxit の判決が下され

るまで）停止を命じられる。

（a）それ等の判決が有者によってなされた場合、一般に法

的には、暴力禁止という立場から、またその限ら

ないべきである。Paxit は、暴力禁止という立法から、

事実を強制するのを目的とし、そのために、有者

の行為を禁止する命令は、暴力禁止という立法から、

自力救済を妨害するかどうかを問う。Paxit は、首

に自力救済を妨害するかどうかを問う。
われわれは(d)のケースに注目したい。すなわちもし

Prawerが主張するように、「Subjekt」というものの中には,

非占有者は、たんなる要式行為を通じて相手方の防禦を

抑制するにすぎぬ象徴的要式行為とみなす理由がある。すなわち、一般に

ことを同時に意味するということになる。すなわち、一般に

Prawerが主張するように、「Subjekt」というものの中には,

非占有者は、たんなる要式行為を通じて相手方の防禦を

抑制するにすぎぬ象徴的要式行為とみなす理由がある。すなわち、一般に

Prawerが主張するように、「Subjekt」というものの中には,

非占有者は、たんなる要式行為を通じて相手方の防禦を

抑制するにすぎぬ象徴的要式行為とみなす理由がある。すなわち、一般に

Prawerが主張するように、「Subjekt」というものの中には,

非占有者は、たんなる要式行為を通じて相手方の防禦を

抑制するにすぎぬ象徴的要式行為とみなす理由がある。すなわち、一般に

Prawerが主張するように、「Subjekt」というものの中には,
結論にかえて

以上、われわれが Rabel が示唆しているところでもある。Rabel が示唆しているところでもある。
1902, S. 357.


(3) P. H. H. Merck, "Die Philosophie. Paläophysik, Paläographie, Paläographie.

(4) A. V. Heister, "Die Philosophie. Paläophysik, Paläographie, Paläographie.


1903, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.

(6) M. J. G. Meier, "Die Philosophie, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1904, S. 357. Pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1905, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1906, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1907, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1908, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1909, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1910, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1911, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1912, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1913, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1914, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.


1915, S. 357. En pour l'entretenir des lois de la science.

203, "Aapg, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture, l'agriculture.
In deze takenwording wordt een vonnis ten laste gelegd van iemand die betrokken is bij een diefstal. Het vonnis bevat een lijst met specificaties die verband houden met de procedure van de zaak, zoals de werkzaamheden van de procureur, het procesonderzoek, de aanwezigheid van getuigen, de afhandeling van het dossier en de conclusie. Het is een concrete illustratie van de juridische procedure bij een diefstalzaak in een geverifieerd en meetvast systeem.

De detailopgaven zijn overzichtelijk en duidelijk opgenomen in de takenwording, waarbij de juridische novelties en relevante jurisprudentie worden genoemd. De juridische termen en juridische begrippen zijn op een duidelijke en accuraat manier gepresenteerd, waardoor de opdrachtgever een betrouwbare overzicht van het huidige juridische standpunt kan krijgen.

Door deze instructies en de aangeboden juridische novelties en jurisprudentie te gebruiken, kan de opdrachtgever de juridische procedure volgens de gebonden voorwaarden van de zuivering en de procedure voor het strafrechtelijke vonnis bij een diefstalzaak nemen. De juridische instructies en de aangeboden juridische novelties en jurisprudentie zijn van hoge kwaliteit en relevant voor de uitvoering van deze juridische takenwording.
古典期アテネにおける所有権法の若干の問題

（31）


[8] Jures. III. 59. 注 (38) 参照。
(1) Titel. Konstitutionelle Erklärungen. ZS XXIII 1961 SS. 3-100. Wohlgemuth, Die Grundlagen der Gesetzgebung

(2) Schell in memoriam Adria Abortion. 1957 SS. 313

S. T. Vam. I. (MDP's. 99 Anm. 32)

Gernet, Droit de société dans la France ancienne. 1955
cf. SS. 167-168. Hertzen, op. cit. 1927-221)


SS. 1980: I W. Jorns, Die Freiheit, 1950


Prager, The French, 1977. SS. 31-241; J. Kassel, Der Freihandel

Actien. Studies in honour of Alfred Abortion in divorce

(3) Un Problème de la transposition du Droit.

Subsistance et transposition. ZS IX 1943 S. 41 Anm. 1. Wohlgemuth, Die Grundlagen der Gesetzgebung

(4) Wohlgemuth, Die Grundlagen der Gesetzgebung

PHILOSOPHICAL HISTORY REVIEW. 66, 1995 SS. 1-19

The Present Day. ZS XXI 1945 SS. 286f. J.

Joyns, The Law and Legal Theory of

Greece (MDP). 1979 SS. 1-19

Selbsthilfe zum römischen Prozeß. ZS XXIII 1961 SS. 41 A. Wohlgemuth, Die Grundlagen der Gesetzgebung

(5) Wohlgemuth, Die Grundlagen der Gesetzgebung

PHILOSOPHICAL HISTORY REVIEW. 66, 1995 SS. 1-19

The Present Day. ZS XXI 1945 SS. 286f. J.

Joyns, The Law and Legal Theory of

Greece (MDP). 1979 SS. 1-19
古典期アテナイにおける所有権法の若干の問題

(33) 古典期アテナイにおける所有権法の若干の問題

(47) Pauli, op. cit. S. 319-320, 327.

(48) Rabel, op. cit. S. 197.

(49) ibid. S. 192.

(50) Rabel, op. cit. S. 156.

(51) ibid. op. cit. S. 326.

(52) Rabel, op. cit. S. XXXVI, S. 389.

(53) ibid. op. cit. S. 193-194.

(54) ibid. S. 191.

(55) ibid. S. 192.

(56) ibid. op. cit. S. 320.

(57) ibid. op. cit. S. 136.

(58) ibid. op. cit. S. 136.

(59) ibid. op. cit. S. 136.

(60) ibid. op. cit. S. 136.

(61) ibid. op. cit. S. 136.

(62) ibid. op. cit. S. 136.

(63) ibid. op. cit. S. 136.

(64) ibid. op. cit. S. 136.

(65) ibid. op. cit. S. 136.

(66) ibid. op. cit. S. 136.

(67) ibid. op. cit. S. 136.

(68) ibid. op. cit. S. 136.

(69) ibid. op. cit. S. 136.

(70) ibid. op. cit. S. 136.

(71) ibid. op. cit. S. 136.

(72) ibid. op. cit. S. 136.

(73) ibid. op. cit. S. 136.

(74) ibid. op. cit. S. 136.

(75) ibid. op. cit. S. 136.

(76) ibid. op. cit. S. 136.

(77) ibid. op. cit. S. 136.

(78) ibid. op. cit. S. 136.

(79) ibid. op. cit. S. 136.

(80) ibid. op. cit. S. 136.

(81) ibid. op. cit. S. 136.

(82) ibid. op. cit. S. 136.

(83) ibid. op. cit. S. 136.

(84) ibid. op. cit. S. 136.

(85) ibid. op. cit. S. 136.

(86) ibid. op. cit. S. 136.

(87) ibid. op. cit. S. 136.

(88) ibid. op. cit. S. 136.

(89) ibid. op. cit. S. 136.

(90) ibid. op. cit. S. 136.

(91) ibid. op. cit. S. 136.

(92) ibid. op. cit. S. 136.

(93) ibid. op. cit. S. 136.

(94) ibid. op. cit. S. 136.

(95) ibid. op. cit. S. 136.

(96) ibid. op. cit. S. 136.

(97) ibid. op. cit. S. 136.

(98) ibid. op. cit. S. 136.

(99) ibid. op. cit. S. 136.

(100) ibid. op. cit. S. 136.

(101) ibid. op. cit. S. 136.

(102) ibid. op. cit. S. 136.

(103) ibid. op. cit. S. 136.

(104) ibid. op. cit. S. 136.

(105) ibid. op. cit. S. 136.

(106) ibid. op. cit. S. 136.

(107) ibid. op. cit. S. 136.

(108) ibid. op. cit. S. 136.

(109) ibid. op. cit. S. 136.

(110) ibid. op. cit. S. 136.

(111) ibid. op. cit. S. 136.

(112) ibid. op. cit. S. 136.

(113) ibid. op. cit. S. 136.

(114) ibid. op. cit. S. 136.

(115) ibid. op. cit. S. 136.

(116) ibid. op. cit. S. 136.

(117) ibid. op. cit. S. 136.

(118) ibid. op. cit. S. 136.

(119) ibid. op. cit. S. 136.

(120) ibid. op. cit. S. 136.

(121) ibid. op. cit. S. 136.

(122) ibid. op. cit. S. 136.

(123) ibid. op. cit. S. 136.

(124) ibid. op. cit. S. 136.

(125) ibid. op. cit. S. 136.

(126) ibid. op. cit. S. 136.

(127) ibid. op. cit. S. 136.

(128) ibid. op. cit. S. 136.

(129) ibid. op. cit. S. 136.

(130) ibid. op. cit. S. 136.

(131) ibid. op. cit. S. 136.

(132) ibid. op. cit. S. 136.

(133) ibid. op. cit. S. 136.

(134) ibid. op. cit. S. 136.

(135) ibid. op. cit. S. 136.

(136) ibid. op. cit. S. 136.

(137) ibid. op. cit. S. 136.

(138) ibid. op. cit. S. 136.

(139) ibid. op. cit. S. 136.

(140) ibid. op. cit. S. 136.

(141) ibid. op. cit. S. 136.

(142) ibid. op. cit. S. 136.

(143) ibid. op. cit. S. 136.

(144) ibid. op. cit. S. 136.

(145) ibid. op. cit. S. 136.